がん登録実務者の増員への取り組みについて

戸来　安子[1)]、佐々木　真理子[1)]、寺澤　篤史[1)]、井上　隆輔[2)]
東北大学病院 医事課 [1)]　東北大学病院メディカルITセンター[2)]

Ⅰ　目的

当院は都道府県がん診療連携拠点病院であり、院内がん登録は、医事課 診療録管理係に所属している診療情報管理士、15名の中から4名が専従で年間約4,000件の登録をしている。

診療情報管理士は、業務の高度化・多様化への対応のため多忙であるが、その状況で高い精度を保ちつつ、継続的にがん登録実務者の増員に取り組んだ内容を報告する。

図１は2007年以降の登録数の推移を示している。

図２は診療録管理係の組織図で、係内でのがん登録有資格（以下、がん登録士）の率は、53.3%である。

図１　登録件数の推移

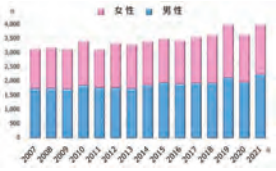


図２　診療録管理係組織図

Ⅱ　方法

係員の診療情報管理士の中で、がん登録実務を希望する者が当院での新人教育プログラム（図３）に則り約1年間がん登録に従事し、がん登録実務初級認定者（以下、初級）の資格を取得するよう指導を行った。

初級の資格取得後は、がん登録実務中級認定者（以下、中級）の増員のための指導も行った。

図3　新人教育プログラム

◆指導手順

1. 当院独自の院内がん登録入力シート（表１）に必要事項を記入し、その内容をHos-canR Nextに入力する。
2. ケースファインディングされた症例を、Excel形式の一覧にした「登録内容管理表」（表２）に、1日の作業内容（登録状況、重複番号、作業時間、作業日、担当者）を入力する。
3. 登録した翌日に、指導担当の中級が内容を確認し、誤りがあったらテキストや、国立がん研究センターが監修している「がん登録SNSサイト」等から誤りの根拠を示し指導する。
   中級は、「登録内容管理表」に1症例に対する指導回数も入力する。
4. 一年分の登録が完了したら、「登録内容管理表」を利用し、業務量や正解率、指導回数を集計する。

表１　登録入力シート(抜粋)

表２　登録内容管理表

Ⅲ　結果

◆各評価結果

「登録内容確認表」を利用し、正解率（修正なし登録）、がん登録件数、データ処理数等をがん登録士別に分析した。

図４は修正なしでHos-canR Nextに登録された件数、図５はがん登録した症例を主要５部位とそれ以外で分析した内容、図６は2021年症例としてケースファインディングされた約12,000のデータ処理数の分析である。

各項目の集計結果を総合的にみて各登録士の実務評価をしている。

図４　正解率（2021年以外）

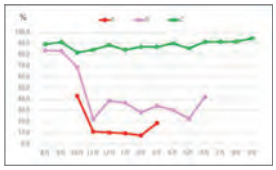
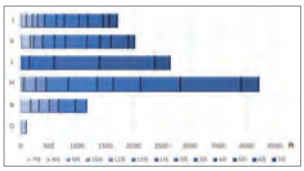


図５　がん登録件数

図６　データ処理数



◆がん登録士数の状況

図７は平成29年と令和４年のがん登録士数の比較ですが、平成29年は、がん登録士8名（中級2名、初級6名）、令和４年も8名（中級3名、初級5名）であるが、平成29年より中級者が1名増えている。また、がん登録の担当も３名から４名となっている。

表３は当院のがん登録士の変遷であるが、採用時にがん登録士の資格保有者は4名（初級4名）、この6年間で指導後に新規に登録士の資格を取得したのは7名（中級2名、初級5名）である。

なお、院内での配置転換が１名（初級）、資格失効者が３名（初級）、残りの５名は退職で、４名（中級1名、初級3名）は他施設へ転職し、１名は家庭の事情での退職であった。

退職者の殆どは、他施設でがん登録士として勤務し、現在もがん登録に関する情報交換も継続している。また、正規職員として採用され、中級へ挑戦するなど活躍している。

図７　がん登録士数の比較（平成２９年と令和４年）

表3　がん登録士の変遷

	平成29年（2017年）	新規採用時有資格者（指導なし）	新規合格者（指導あり）	配置転換・退職者 資格失効者	初級から中級へ移動	令和4年（2022年）
中級	2	0	2	1	−	3
初級	6	4	5	8	2	5
合計	8	4	7	9	2	8

Ⅳ　結論

登録の誤りのフィードバック時は、根拠を示すなど指導方法を確立したため、指導を受ける側と指導を行う側の双方に有用な効果があると思う。登録士の増員の取り組みは、若年者の非正規職員が多い当院では、キャリアアップのためには重要な経験と考えられる。今後の課題は、指導をする中級の負担軽減であるが、管理士の配置転換や転職等を考慮すると、引き続き教育機関の大学病院として、有能ながん登録士の育成に努めていきたい。

日本がん登録協議会
第32回学術集会
COI開示
筆頭演者名：戸来　安子

当演題発表に関し、
開示すべきCOIはありません。